教科でキャリア教育

ふたば未来学園高校（福島・県立）

第53回 国語

今号の先生

国語
佐々木一天（かつひろ）先生

大学の文学部を卒業後、高校教員に。教員7年目のときに大学院で2年間学ぶ。現任校では今現在、アカデミック系列、トップアスリート系列、スペシャリスト系列という3系列の生徒すべてと国語の授業で関わる。バドミントン部の顧問も長く務めており、現在は、技術指導は専属の監督やコーチに委ね、部員の進路支援や事務作業を主に担当。

言葉にすることで生活体験を揺り動かし、ふたがされている生徒の内面を耕す

3年間ずっと続けてきた書く・話す・聞くことの活動

「食事をするとき、食べる順番はどんな感じですか？」

3年生の「論理国語」の授業は、定番の文章トレーニングから始まった。出されたお題に対し、生徒おのおのが原稿用紙に400字以内で文章をつづる取組だ。書くことの糸口をつかめるよう、まずは隣同士で情報交換。そのうえで約10分間の作文に挑む。原稿用紙の7割を超えるところに赤い線が引いてあり、8割を超えるところに青い線があり、各ラインに達するかでA・B・Cの評価がつく。

ある生徒がもどかしそうに声をあげた。

「あと5文字足りない！」

するとまわりの生徒が助け舟を出した。

「好きな食べ物のことを書けば？」

「今の食べ方をこれからも続けたいか、とか、自分の気持ちも書けばいいじゃん」

話題を広げるコツを、生徒たちそれぞれが自分なりに培ってきたようで、少なくとも7割のラインは次々に超えていった。

続いて、話す・聞くことのトレーニング。書いたことを基に話を組み立て、原稿は見ないで、隣の生徒に1分間で説明する。

「のどを潤すために、まず水を飲みます」

「ご飯はおかずと一緒にかきこんで、あいだに味噌汁を飲んで」

「嫌いなものは先に食べるようにして」

「朝はしっかり食べて、夜は軽めで…」

そのあとの1分間は、聞いた側が質問するターン。気になったことを投げかけて相手の話をさらに引き出していく。

「嫌いな食べ物はなんですか？」

「オクラとナス、海鮮類」

「まじ？」

「食わず嫌いって感じもある。オクラは食べて無理だった」

ふたば未来学園高校の佐々木一天先生は、こうした書く・話す・聞くことのトレーニングを週に一度は行ってきた。1年次の「言語文化」の授業から2・3年次の「論理国語」の授業まで継続的に。

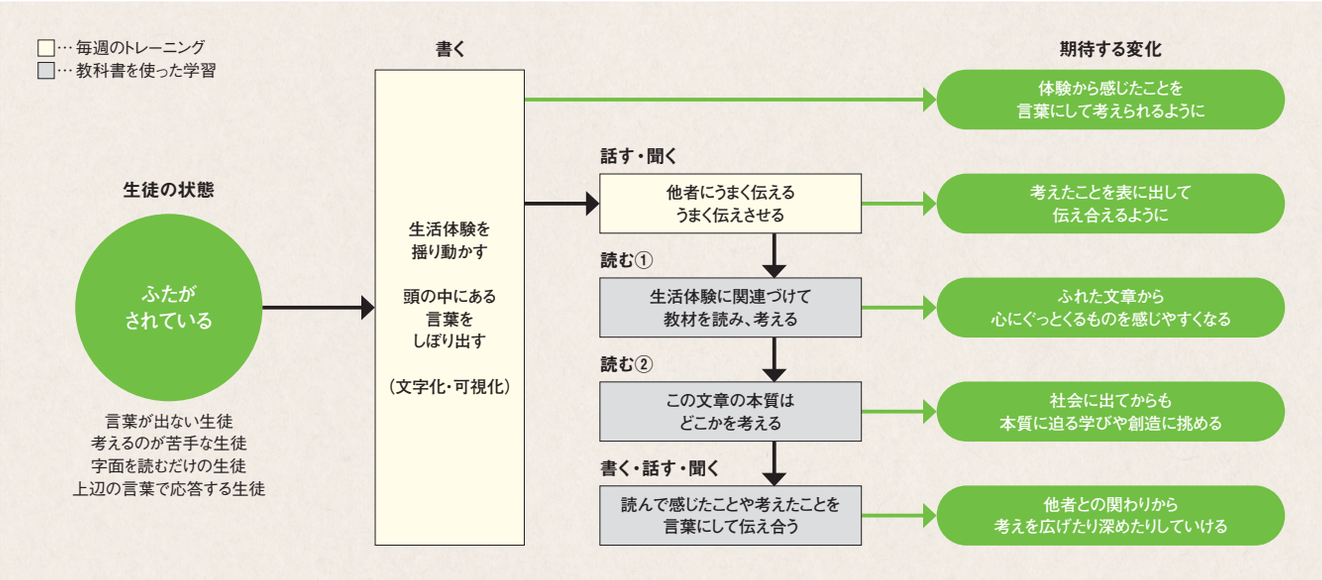
きっかけは、以前に3年間もち上がりで生徒と関わったとき、最終学年になってからの進路相談で「生徒も教員もお互いに苦労することがあった」からだ。

「進学や就職に向けて小論文や履歴書を書こう、となったとき、言葉が出てこない生徒がいたのです。どういう体験から何を感じたか振り返るように促しても、体験したことは多々あっても具体例が浮かばない。こちらからの問いかけで話を深めようとしても、胸の内から考えを引き出そうとする、というより、短絡的にパッと答えてしまう生徒や、上辺の言葉に終始してしまう生徒がいました。『ふたがされている』というか。冬の田んぼのように表面がガチガチに固まっていて、内側の思いや感情を自分でもとらえきれずにいる生徒が結構いると感じたのです」

だから授業で、日常のことを生徒が言葉をしぼり出して振り返り、「生活体験を揺り動かす」ようにした。そうして可視化した自分の思いや感情を、生徒同士で伝え合うことも行ってきた。

取材・文／松井大助　撮影／神田 仁

言語文化・論理国語の授業の展開例とそのねらい



教材をどのように読めば生徒が何を得られるかを考えて

トレーニングのあとは教科書を使った学習に入る。ペアでの音読。対比構造など着目すべき点を押さえたうえで、先生と生徒の問答による文章読解。個々での文章読解。再びペアになって意見交換。

さらに単元まとめの授業では、読んだ文章から感じたことや考えたことを、振り返りシートに各自が記述する。シートには罫線付きの記述欄と目標ラインが設けられていて、ここでも言葉をしぼり出して。その思いをまた生徒同士で伝え合う。

取材した日の授業の終わりには、前の単元の振り返りシートを返却しながら、佐々木先生が参考資料も配付した。

「前回学んだ『贈り物』としてのノブレス・オブリージュの一つです。この言葉、どこかで見たことないですか？」

「煉獄じゃない？　煉獄じゃない？」

「そう、（アニメ『鬼滅の刃』に登場する）煉獄さんのお母さんの言葉ですね」

「おーかっこいいー!!」

そのように学習内容と関連する言葉を「生徒の生活体験に近そうなところ」から見つけては共有することもしている。

「教材の本文を、生徒が自分の生活から遠いものと感じたまま読むと『なんだかよくわかりません』で終わります。そうではなく、この点について自分はどうか、などと、生活体験に関連付けて読むことで、教材でふれたさまざまな見方や考え方を『面白い』『なるほど』と感じてほしいのです。心にぐっとくるものが残ってほしいんですよね。何年後か何十年後に『授業であんなことやったな、その考えでちょっとがんばろう』などと思えるように」

また、「文章の本質はどこかを考えよう」とも促してきた。筆者の主張や主題など。その意図は、一つは近い将来のためだ。

「進学や就職のための試験で、文章読解や、文章を読んだうえでの論述を求められたときは、『本質を捉えてから答える』ことが重要だと思うからです。そうでないと的外れな回答をしてしまいます」

加えて、本質をつかもうとする姿勢は、実社会でも役立つと考えているからだ。

「例えば仕事で専門性を磨いていきたいとき、自分の仕事の本質は何かを常に考えて学ぼうとする人のほうが、成長できると思うのです。また、仕事で商品開発やプロジェクトに挑むときも、そこで求められる本質は何かを考えながら取り組んでこそ、体裁だけを整えたのではない、核心をついたものを創造していけるのではないか、と思っているのです」

文章トレーニング。1年生のときに300字以内で作文することから始め、3年生になった現在は400字以内の作文に取り組んでいる。

話す・聞くトレーニング。うなずきながら聞いていた生徒のことを称賛するなど、話す・聞くときの姿勢まで磨くことを目指している。

ペアでの教科書の音読。その後、個別に文章読解に取り組んでからまたペアで意見交換するなど、生徒同士で協力し合う場面も多い。

授業ができるまで

受験という目標がなくても生徒が学びを得られるように

文章を読む面白さを分け合うようなことをしたい。佐々木先生はそんな思いから国語教員になったが、初任の進学校では受験のための教科指導に励むことになったという。周囲がそれを期待していたからであり、自身もその環境になじんでいった。

ところが、2校目で工業高校に異動すると、初任校で培った教科指導がまるで通用しなくなる。文章の読み書きに苦手意識をもつ生徒が多かったためだ。授業中に寝ている生徒を起こすと、「先生、俺は学校に来るだけで精一杯なんだよ」と返された。卒業後は就職する生徒が多く、受験というのは国語を勉強する理由にならない。「自分は何のために国語の授業をしているのか」。迷うことが増えた。

だから、大学院に通う研修制度があるのを知ると希望し、2年間、国語教育について改めて研究した。「教える」から「学びを提供する」に視点が変わり、工業高校に戻ると、目の前の生徒たちがどうすれば国語の教材から学びを得られるかを模索した。結果、生活体験に関連付けて教材を読む授業を目指すようになった。

さまざまなタイプの生徒が思いを言葉で発信できるように

現在のふたば未来学園高校には創立時に着任、幅広いタイプの生徒と関わってきた。同校には、大学進学を目指すアカデミック系列、スポーツの分野での活躍を目指すトップアスリート系列、農業・工業・商業・福祉での活躍を目指すスペシャリスト系列の3つがあるからだ。

その三者三様の生徒たちと向き合うなかで抱いたのが、「一人ひとりが自分の思いをもっと言葉にできるようにしたい」という意識だ。生徒の言語化を促すには、「書きたくなる場をつくる」ことも重要であることを、大学院時代に恩師から学んだ。そこで「おにぎりの具は何がいいか」といった、くだけたテーマで生徒全員が作文し、校舎に掲示する取組をやってみた。

さらにそうした作文を日々の授業でも行えるよう、生徒からもアイデアを募って、左の図のように、書きやすい問いから、慣れてきたら挑戦する思索的な問いまで、さまざまな問いを編み出していった。

INTERVIEW・教科を越えたつながり

生徒たちが達成感を得ながら思考するには

数学
鈴木貴人先生

佐々木先生が学年主任を務める学年団でご一緒し、3年目になります。すごいと思うのは、1年次から蒔いた種が、実を結びつつあることです。佐々木先生は、生徒に相当な量の作文を書くことを求め、それを日々読むような生活をされてきました。課外活動でも生徒自身で考えるよう促してきました。

結果、例えば数学の授業で「なぜ間違った回答になったか話し合ってみよう」と促すと、今ではどのクラスの生徒も自分の考えを基に結構話せるのです。大学進学や就職をゴールと捉えず、その先で何をしたいかまで考える力もついたと感じています。

文章や漢字のトレーニングを、本校の3系列の生徒たちの特性に合わせて、柔軟にされているのも特徴だと思います。私も数学の授業では、習熟度に合わせた課題に、生徒たちが毎週取り組むという時間を設け、各自が達成感を得ながら学んでいけるような環境にすることを目指しています。

文章トレーニングでは、難しいテーマでも諦めずに作文するなど、培った筆力で生徒たちが佐々木先生を驚かせることも増えてきた。

コミュニケーションが苦手な生徒もいたが、自分の思いを文字にしてから話すことを重ねていくと、徐々に慣れていったという。

文章トレーニングの問い一例

書きやすい・書きたくなる問い

- 最近あったちょっとラッキーなことを教えてください。
- 最近メチャクチャ寒いですが、寒さをしのぐ方法、寒い時のオススメの過ごし方、寒い時期に気を付けていること等々、教えてください。
- 「金と時間には糸目をつけねーぜ!」となったとしたら、どこか行ってみたいところはありますか??　詳しく教えてください。

就職や進学を見すえた問い

- 高校入学時と比べて、「少しは自分も成長したなあ」と思うところはどこですか。成長させてくれたもの(こと)を交えながら説明してください。
- 苦手な物事に対応しなければならなくなった時に、あなたはどのような行動を取りますか??　具体的に教えてください。

学習した教材を踏まえた問い

- あなたが持つ「美意識」にはどのようなものがありますか??　具体例を踏まえながら、600字以内で説明してください。
- あなたが今までにした「選択」の中で、大きなターニングポイントになったものは何ですか。具体例を踏まえながら、600字以内で説明してください。

ふたば未来学園高校(福島・県立)

School Data

創立2015年／総合学科
生徒数(高校)458人(男子238人、女子220人)
進路状況(2025年3月卒業)大学79人、短大3人、専門学校19人、就職24人、その他7人

Outline

併設型の中高一貫校で、高校からの入学も可能。震災と原発事故で、双葉郡内の中学校や高校の生徒が本来の校舎を離れて学ばざるを得なかった期間を経て、教育の復興と新たな教育の創造を目指して開設された。建学の精神は「変革者たれ」。

生徒はこう変わる

言葉を使うことになじみ自分の思いを周囲にも伝える

自身の生活を振り返って文章を書き、それを基に話す・聞くトレーニングを毎週行ってきた生徒たち。始めたばかりの1年生のころは、筆が進まず、話も途切れがちだったが、3年生になった今では、少し難しいお題でも言葉をしぼり出して作文し、その後の対話も盛り上がるようになった。そうして可視化した自分の生活体験と結びつけながら、教材にふれることで、さまざまな文章を読むことにもなじんできたように佐々木先生は感じている。

具体的な変化として見てとれるのが、定期テストの回答だ。

「最初のころは白っぽい回答用紙が多かったのですが、最近では記述式の回答欄も、生徒たちが投げ出さずに言葉を埋めるようになりました。模範回答のような内容のものばかりではありませんが、おのおのが出題文をよく読んで向き合い、格闘しながら回答を作ったことがうかがえるんです。こちらもその回答をきちんと読まなければいけないので、体感ですが、採点にかかる時間は長くなりました」

探究活動でも、以前は自分の思いを言葉にすることや、人前で発表することに強烈な苦手意識をもってしまう生徒がいたが、トレーニングしてきた生徒たちにそこまでのつまずきはない。また、3年生になって進路面談が始まると、担任の先生たちから「ちゃんと備えてきています」という声があがるようになった。目指したい分野を生徒が自分なりに考えて、親にも相談したり、調べ物をしたりしたうえで面談にくるようになったのだ。

「国語の授業だけでなく、ほかの先生方の授業や課外活動も通して生徒が成長したからですが、『自分は何をしたいか、言葉を使って考え、まわりにも伝えていく』という、そのベースラインは築くことができたのかな、と感じています」

現3年生に対しては、今後、毎週のトレーニングで、次のような意識で言葉を使うこともさらに促したいと考えている。文字化した自分の思いを基に「原稿は見ないで、書いた原稿をそらんじるのでもなく、相手の目を見ながら、伝わるようにその場でスピーチする」。そうした姿勢は、進学や就職の面接にも欠かせないし、社会に出てからのプレゼンテーションや話し合いでも生きてくると思うからだ。

「私たちは言葉と一緒に生きていきます。その言葉を豊かに使えるようになることが、生徒たちの人生を豊かにする一つの道筋になればよいなと思っています」

生徒INTERVIEW

書き続けると考えがまとまり話せるように

スペシャリスト系列農業
赤塚優翔さん（3年生）

佐々木先生の授業では、文章トレーニングや、隣の人との意見交換をよくします。もともと自分は、書くことも、コミュニケーションを取ることも苦手だったので、最初は嫌だなあと思っていました。でも毎週続けていくと、段々と書ける分量が増えていき、そうやって頭の中にあることを一度言葉にしてから話すうちに、対話にも慣れてきました。

今ではさまざまなお題をみんなで考えるのが楽しいです。これまで考えたことがなかったことまで文章にし、意見交換すると、視野が広がるので。その影響で、いろいろな人の文章を読むことも好きになりました。この先は栄養学を勉強し、まわりの健康を支えられる人になりたいと思っています。

思いを言語化し人の考えにもふれて物事を見つめる

アカデミック系列文系
紺野琉美子さん（3年生）

佐々木先生の授業の特徴は、自分はどう思うかを文章にして、生徒同士で伝え合うことまですることです。また、現代文や古典を読むときに、今に通じるプラスαのことも教えてくださるので、文章をより深く読めるとも感じています。自分の考えを言語化し、同級生や筆者の考えにもふれる。そうした活動を通して、人間のことや物事について考えを深める姿勢が身についたように思います。

今後は、大学で歴史を学びたいと思っています。ある国とある国はどうして今の関係になったのか。お祭りなどの文化はどのように継承されてきたのか。歴史をひも解き、自分たちのこれからの道しるべとなるものを見いだしていきたいからです。

授業作りのポイント

- **自分の生活体験を言葉を使って振り返ることや、その体験と関連づけながら、さまざまな文章を読むことや対話をすることにも挑むなかで、ものの見方や考え方を深めていってほしいと思っています。**
- **言葉で伝え合う力も磨き、周囲とうまくコミュニケーションを取って生活できるようになってほしいです。**

\ Point.1 /

生活体験を言語化する

日々の生活のなかで感じていることや考えていることを、生徒が毎週、お題に沿って文章にすることで、自分の感情や思考を可視化。それを基に生徒同士で対話もして、自分の考えをさらに広げたり深めたりする。

\ Point.2 /

生活体験と教材をつなげる

毎週行う生活体験の言語化と、教材の学習内容に関連性をもたせて、生徒の読むことへの意欲を高める。また、教材を通して学んだテーマ（美意識や選択など）に沿って、生徒が生活体験を言葉にして振り返ることも促す。

\ Point.3 /

共有する言葉をストックする

生徒たちの関心が強いドラマや著名人などにもアンテナを張りながら、先生自身が共有したい言葉を見つけてはストック。その言葉と関連する教材のテーマがあったときに示して、日々の生活と教材をさらにつなげる。

\ Point.4 /

NO原稿でスピーチ

生徒同士の対話は、おのおのが自分の考えを一度文章にしてから行うのが基本。ただし文章を読み上げるのではなく、そこで整理された思考を基に、相手の目を見て、伝え方を工夫して話すよう、生徒に繰り返し求めている。